

別紙 2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：黄 竹佑

この課程博士学位請求論文の審査は、(主査) 田中伸一、(副査) 伊藤たかね、広瀬友紀、高山知明(金沢大学)、田中雄(同志社大学)の5名によって行われた。公開審査は令和2年11月14日(土)10時から、Zoom会議上において開催された。論文題目はHead-Dominancy Correspondence in Japanese Non-Simplex Word Accentuation(日本語非単純語アクセントにおける主要部と優位性の対応関係)である。以下、審査結果の要旨を報告する。

本博士論文は日本語東京方言を研究対象とし、形態論と音韻論のインターフェイスの観点から、非単純語アクセント規則の適用に関わる形態的・音韻的要因を探り、「音韻的優位性(phonological dominancy)」という新しい概念を提唱することで、種々の非単純語アクセントを統一的に説明するモデルを構築した、意欲的かつ独創的な研究である。構成は5つの章からなり、各章は以下のような論点を持つ。

第1章は日本語アクセントの性質を概観しつつ、特に複合語アクセント規則の適用性を再考している。東京方言では、複合語アクセント規則は拘束形態素を含む「合成語」と自由形態素からなる「複合語」に適用されることを主張し、この2つを「非単純語」という形態的カテゴリーに分類している。また、非単純語を構成する2つの要素の中で、片方の要素が非単純語全体のアクセント型を決定するという非対称的な関係に着目し、この決定要因を「優位性」(dominancy)という概念で捉えられることを主張している。

第2章は「優位性」の概念を洗練・実証するもので、「優位要素の位置」と「元の要素のアクセント型の保持可能性」を勘案することにより、非単純語がいくつかのカテゴリーに分類されることを論証している。具体的には、複合語で片方の要素のアクセントしか保持されない左側優位(left dominancy)と右側優位(right dominancy)の事例のほか、両方の要素ともアクセントを保持されるゼロ優位(zero dominancy)の事例、そしてアクセント型を決める優位な要素がもう一方の要素のアクセント型を参照するというアクセント転移(accentual transfer)の事例などである。

第3章では、非単純語における形態階層と音韻階層の写像関係に着目し、その理論的整備を行なっている。いわゆる語と句の定義は形態論と音韻論で異なる場合があり、日本語の形態部門では「語」であるにもかかわらず音韻部門では「句」として具現される例(一対一の写像関係にならない例)が報告されてきた。こうした例は複雑で、従来の理論モデルで説明することができない。そこで、形態的単純語のみ「音韻語(phonological word)」として具現され、合成語と複合語などの非単純語はどちらも「音韻句(phonological phrase)」に写像されるというモデルを提唱している。これにより一対一の写像関係が成立し、従来説明できなかった形態と音韻の不一致を解決できるとしている。

第4章では、「音韻的優位性」と「形態的主要部」の相互作用について探求し、非単純

語をめぐるこれまで主張してきた一般化の射程をさらに広げつつ、非単純語のアクセントの全体的事例を最適性理論の枠組みから分析している。具体的にいうと、[a'me kaze]「雨風」のような並列複合語(dvandva compound)は、先行研究では2つの要素とも主要部であるされてきたが、ここでは優位性と主要部が一致する（左側要素のアクセントが保持される）という観点から、左側要素が主要部であると主張している。また、並列複合語だけでなく、これまで見てきた左側優位、右側優位、ゼロ優位、アクセント転移のすべての事例において、なぜそこにアクセントが付与されるのかを統一的に説明するモデルを、最適性理論に基づき構築している。

第5章は結論であり、本論文の内容の要約、および成果や意義などがまとめられている。つまり、従来の形態論と音韻論の研究成果を踏まえつつも、「主要部」と「優位性」といった概念を応用して非単純語のアクセント規則を再考し、統一的な理論モデルを構築したということである。

本論文の評価として、その成果や意義を挙げるなら、次のようにまとめられよう。すなわち、1) 多義的に使われてきた「主要部」という用語と、新しい概念である「優位性」を明確に区別し、それぞれの存在意義を論証したこと、2) 左側優位、ゼロ優位、アクセント転移の事例を中心に、アクセントの新しいデータ・新しい解釈を提供したこと、3) 形態構造と音韻階層の一対一の写像モデルの提案により、従来説明できなかった形態語と音韻句の写像不一致を解決したこと、4) 「主要部」と「優位性」の概念を応用することにより、これまで問題となっていた並列複合語のアクセントを説明できるようにしたこと、5) 従来の研究成果や新しい概念の提唱を踏まえて、非単純語のアクセント規則を統一的に説明する理論モデルを構築できたこと、などが挙げられる。全体としては、記述的価値と理論的価値がバランスよく整った、博士論文としての水準を十分に満たした研究であると結論付けてよいだろう。

このように実証的・理論的意義について高く評価された成果があった一方で、いくつかの問題点も指摘された。具体的には、1) 質疑を通して最終的には解消されたものの、「アクセント転移」の事例がその新しさゆえにわかりにくく、その意義や生産性が複数の審査委員から疑われたこと、2) 非単純語のアクセントについて、そのバリエーション（揺れ）が必ずしも考慮されていないこと、3) 形態構造と音韻階層の対応を捉える際に、形態論と統語論の区別が必ずしも正確になされていない場合があること、4) 3要素以上の複合語を考える際に、構造的曖昧性を排除する例を用いた方が適切であること、5) 理論的価値にやや弱い面があり、最適性理論を応用するだけでなく、理論の進展そのものに寄与する論点も望まれたこと、6) その他、特定の具体例や表や本文字句の修正、などが挙げられた。これらはすべてもっともな指摘であった。

しかし、これらは全体の価値を揺るがすほどのものではなく、今後の研究の発展に生かす方向で取り入れるべき指摘であって、内容そのものの信頼性が損なわれるわけではない。総合的には、形式・内容ともに水準以上の力作であるとの審査員全員の合意を得たので、審査委員会としては博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。